

精選

文学国語

構成・読解ノート（小説・評論）

明治書院

解説
解答
編

言葉によって

P 4 ～ P 5

解答 内容理解

1 行動 2 想像 3 時代 4 言葉 5 文化
6 おもろ 7 平和 8 古典 9 現実
10 存在

解答例 語句

想像力 失われた内容を、想像力を発揮して復元する。

野望 全国制覇の野望を抱いてチームを整備する。

実在 歴史上の実在の人物を作品のモデルとする。

時点 事件が起こった時点での対応を反省する。

解答例 要旨

筆者は、本当に選びぬかれた言葉は、その人間の存在と行動と想像力を表現し、その言葉は、一個の人間そのもののような重みを持ち、さらに自分を歴史のうちに位置付け、現実世界に実現することができると述べている。(二〇〇字)

解答例 発展

・「おもろさうし」は、琉球王国時代に首里王府によって編纂された歌集で、「おもろ」は、「歌」の意味。「うりずん」は、沖縄で春分から梅雨入りまでの、一番過ぎしやすい時期を

指し用いられる。

・『飼育』『万延元年のフットボール』『ヒロシマ・ノート』『核時代の想像力』『レイン・ツリー雨の木』を聴く女たち』など。また、六編からなる連作『静かな生活』は、ノーベル賞受賞の翌年、義兄の伊丹十三の監督・脚本により、映画化されている。

・例えば「嘉数の戦い」では、熹数高台をめぐって、「反斜面陣地」を構築して頑強に抵抗する日本軍にアメリカ軍は苦戦し、両軍とも多くの戦死傷者を出す激戦が展開された。

解説

筆者には『想像力論』なる著作もあり、一つの言葉を発することによって、「自分の存在と行動と想像力をひとまとめに表現することができる」というのが、筆者の立ち位置である。『おもろさうし』の例を引きながら、古典から時代全体を表現する言葉を掘り起こすこと、さらに言葉によってその人の実在に迫り死者をよみがえらせる可能性を示し、言葉によってこそ、我々は自分を現実世界に実現し、他者とながりを持てると強調している。

悪童物語

P 6 ～ P 7

解答 内容理解

1 軍用 2 辞典 3 疎開 4 便り 5 聖書
6 不可 7 真実 8 親切 9 命令 10 砲弾

解答例 語句

要領 要領よく解答をまとめて、高得点を取る。

参照 提案する前に、過去の例を参照する。

客観性 反対意見を聞き、客観性を保って議事を進める。

証拠 多くの証拠を集めて、客観的な報告を心がける。

解答例 主題

従姉に問われて、「ぼくら」は日頃の作文練習の通りに、ただ砲弾が落ちて庭に穴が空いた、と事実だけを伝える。「ぼくら」が、その事実をどのように受け止めたのか読者に想像させ、悲劇としての戦争を伝えようとしている。(二〇三字)

解答例 発展

・『悪童日記』『ふたりの証拠』『第三の嘘』の三部作がアゴタ・クリストフの代表作とされ、他に詩作品や戯曲もある。

・一九五六年、共産党政権やソビエト連邦の實質支配に反対するハンガリー国民が、各地でデモを実施、ソ連軍が介入、鎮圧された。多くの命が失われ、多くの難民が生まれている。

・ハンガリー人としての民族意識は持ち続けながらも、生計のため、亡命先の言語、フランス語で作品を発表し続けた。本来、姓↓名の順となる名前も、フランス語風に名乗っている。

・アメリカ軍の戦略爆撃機B―29による日本の都市に対する無差別爆撃や、広島と長崎への原爆投下により、多くの一般市民の命が失われている。

解説

『悪童日記』は、二〇一三年、ヤノシユ・サー監督により映画化されている。監督は、原作の簡潔さをいかに映画的に表現するかに腐心したという。戦時下という厳しい状況を生き抜くために、「ぼくら」は「ぼくらの学習」を続ける。砲撃で失われる命の、冷酷で生々しく、暴力的な描写。学習の成果なのか、母親と妹を失った「ぼくら」は、「砲撃で穴が空いた」という事実だけを従兄弟に語る。この言葉による表現について、読者の想像力が試されているということもできる。

山月記（前半部）

P 8 ～ P 9

解答 内容理解

- 1 死後 2 生活 3 節 4 鈍物 5 温和
6 醜惡 7 消息 8 祝辞 9 さだめ
10 残虐

解答例 語句

俗悪 非道で俗悪な男を演じて、演技賞をとる。
往年 往年の名プレーを、ビデオを見て懐かしむ。

る。

解答例 主題

李徴は虎になった理由を考え、自分の性情に振り回されたことを悔やむ。それでも自嘲癖は変わらず、妻子のことより先に詩の採録を頼んだ自分を嘲る。作者は、月に咆哮する虎に重ね、俺の気持ちは誰にも分からないと嘆く李徴の悲劇を描こうとしている。（一一六字）

解答例 発展

・律詩では、頷聯（第三句と第四句）と頸聯（第五句と第六句）を必ず対句にする規則があり、李徴の即興の詩でも見事な対句となっている。しかもその内容は、今日の虎の姿とかつての逸材だった青年、虎に身を落とした自分と出世した友人が対比される。お笑い草に作った詩が李徴の境遇を際立たせて、人々が肅然とこの詩に聞き入ったことにも納得できる。

・中国では、虎は「百獣の王」とされ、崇拜の対象であった。虎図は厄除けの呪物として用いられた。虎にまつわる慣用句には、「虎の威を借る狐」「はりこの虎」「虎の尾を踏む」「虎穴に入らずんば虎児を得ず」などがある。
・フランク・カフカの『変身』では、主人公は、出張旅行の多い布地の販売員の青年である。ある朝、ベッドで目覚めると大きな毒虫になっていたところから物語は始まり、一家に起こった騒動が描かれ、青年は虫の姿のまま死を迎える。

無我夢中 最後の一周四百メートルを、無我夢中で走る。

礎 創業者の発明品が売れ、会社の礎が築かれる。

解説

虎となった李徴は、友人と出会い、その心境を語る機会を得たというのに、俺の気持ちは誰にも分からないと嘆き、心を開こうとはしない。作者は、虎となって苦しむ李徴がなぜ虎になったのかを振り返り、さらに苦しむ悲劇を描こうとしている。（二二一字）

解答例 発展

・『李陵』は、漢代の武帝の命を受け、北方の遊牧民族匈奴を倒すために出陣、敗れて捕えられる將軍李陵を主人公とする。武帝は皇帝として中央集権体制を強化、国は繁栄、宿敵匈奴の制圧に乗り出したことが時代背景となっている。後に『史記』を編纂する司馬遷は、ただ一人、敗軍の將李陵の戦いぶりを弁護し、宮刑に処せられてしまう。

・『山月記』は、説話『人虎伝』を素材とし、近体詩の成立する唐代での出来事を描いている。唐代の科挙制度で、進士に登第するためには、詩作が課された。後に「詩聖」と称される杜甫は、科挙に何度も落第し、長い放浪生活を強いられている。小官を得てもなお安住を得ることはできなかったが、最晩年に円熟多作の時を迎え、「秋興八首」等の傑作を残している。

解説

即興の漢詩の尾聯に描かれた月に吼える虎の姿は、物語の結びでも描かれる。「尊大な羞恥心」という内心にふさわしい外形に変わったというのは、虎になる理由としてできすぎだろうか。妻子のことより自分のことをまず頼むような人間はどこにでもいそうだけれど、世の中は虎だらけにはならない。李徴の自嘲癖が友を悲しくさせる。自分の悲しみ、苦しみを誰もわかってくれないという嘆きを、咆えるように訴えるのでは、その孤独に救いはないかもしれない。

詩の自由を探る

P 12 ～ P 13

解答 内容理解

- 1 快楽 2 俳句 3 歌詞 4 無意識
5 音楽 6 原型 7 共有 8 習俗 9 機能
10 自己

解答例 語句

一般 難解な表現を一般にわかりやすく改める。
再現 事件を頭の中で再現して、原因を探る。
衝動 犯行が衝動に駆られたものだと結論づける。
創作 広い視野を持つことが、創作の意欲を生み出す。

解説

漢文調で格調高く始まった物語は、友との問答を経て、なぜ虎になったのかを語る李徴の言葉に、読者を引き込んでいく。ちょうど哀愁たちが、草中の声の語る不思議に聞き入ったように。そして、すっかり虎となってしまうことへの恐れが告白され、李徴への共感が生まれたとき、「この気持ちは誰にも分からない。」と言われてしまう。人間の心が残る人食い虎になるさだめなど、決して受け入れられるものではないが、共感してもらえる相手のいない孤独も人間には堪え難い。

山月記（後半部）

P 10 ～ P 11

解答 内容理解

- 1 卓逸 2 非凡 3 微妙 4 薄幸
5 師 6 虎 7 危惧 8 刻苦 9 自嘲
10 詩業

解答例 語句

鬼才 斬新な作風で、世間から鬼才と呼ばれる。
切磋琢磨 同僚と切磋琢磨して、互いに能力を伸ばす。
空費 失敗に茫然として、時間を空費してしまう。
暴露 内部告発で、会社の内情が暴露される。

解答例 要旨

「詩らしさ」という言葉は、行為や自然、絵や音楽にも用いられる。「詩らしさ」を感じる時、こちら側が心の中で詩を作っているのであり、「うたう」という衝動から始まった詩は、書かれる詩となつて、改行された空白に心の調べを響かせている。（一一四字）

解答例 発展

・アイヌの歌謡は口承により伝えられていたが、アイヌ語も日本語も堪能だった知里幸恵の著書『アイヌ神謡集』により、広く知られることとなった。アイヌの歌謡の中に、即興的な抒情詩として「ヤイサマ」があり、その人の節回しでその時々思いが歌われる。その中でも「イヨハイオチシ」と呼ばれる恋歌は、例えば、「鳥になりたい、風になりたい。そうしたら今すぐに、恋しい人のところに飛んでいく。」のような内容が歌われている。
・万葉集中、その三分の一以上が相聞歌である。額田王と大海人皇子（後の天武天皇）との贈答歌が有名。
・源氏物語に登場する女性の中でも、恋に悩み川に身投げる浮舟は、自分の思いを直接に語ることも少なく、手習にことよせて、「身を投げし涙の川のはやき瀬をしがらみかけてたれかとどめし」のように、自らの鬱屈した思いを和歌に託して述べている。

解説

詩的な絵、詩らしい風景、詩を感じさせる小説というものがある。詩のような、感動的な行為があると、筆者は言っている。言語表現にしろ、造形表現にしろ、受けとるこちら側がその作品の世界に深く関わっている。その中でも詩が、読む者の想像力を強く刺激するものであるとすれば、「詩らしさ」としてものを捉える感覚は、詩の本質に直結していることになる。詩を書くものとして表現を固定したことから生じた空白の空間は、読者の想像力が羽ばたく、格好の空間となる。

靴

P 14 ～ P 15

解答 内容理解

- 1 正直 2 非常識 3 消去法 4 仮説
5 重さ 6 変化 7 可能性 8 自由
9 立場 10 靴

解答例 語句

非常識 細かい配慮を欠いて非常識だと非難される。

消去法 選択肢の解答を消去法で導き出す。

制約 予算の制約の範囲内で企画案を作る。

可能性 可能性を信じて最大限に努力する。

解答例 主題

つまらないものしか入っていない靴が、物を入れて運ぶというその役割を変え、その重さで、

持つ者の行き先を決めてくれる。筆者は、新たな制約を得て逆に自由を得るという、「私」に起こった不思議な出来事を描いている。

(二〇二字)

解答例 発展

・『赤い繭』では、家という居場所のない主人公が、自分の家を求めてさまよい歩く。そして、自分の足から出て来た絹糸が身を包み込み、主人公は完全に繭になる。家ができて、帰る「おれ」がいなくなってしまう。「靴」と「家」という身近なものが、その役割を劇的に変えるという展開が、二つの作品に共通している。自ら演劇集団「安部工房スタジオ」を主催し、渋谷西武劇場を本拠として活動した。また、『赤い繭』をラジオドラマ化したり、映画化された作品『砂の女』では、脚本を担当している。

・例えば、川柳や狂歌は、人々にわかりやすい五七五調で、また風刺画は、鮮烈なイメージを提示することで、ともに皮肉を交えて諧謔的な精神で、その時々世相や人物を描いている。

解説

採用した青年が残していた靴を手にしたとき、私は、青年との奇妙な会話の内容に、納得する。中身などどうでもいい。その重さが持つ者の行先を制約して、迷いをなくしてくれる。完全な自由を手に入れられるのだ。いろいろと選べる自由があるのではなくて、選ぶ必要がな

いから、何も考えずに解放されるのだ。二人の奇妙な会話につきあつてこの話を読み終え、なんだか変だけれどもそうかもしれないと思ったとき、我々を制約しているものの多いことに気づかされている。

地球から来た男

P 16 ～ P 17

解答 内容理解

- 1 望郷 2 残酷 3 郷愁 4 追放 5 無数
6 錯覚 7 同情 8 理解 9 順応 10 地球

解答例 語句

人間的 機械的な描写が、人間的でないと批評される。

差異

少しの差異が、商品の価値を高める。

奇異

自分の周囲で起こった奇異な現象を記録する。

待遇 手厚い待遇で、新会社を迎えられる。

解答例 主題

故郷はただ生まれ育った場所というのではなく、そこで育まれた人間関係こそ大切なものかもしれない。筆者は、生活環境や仕事、妻子や家など全てが変わらないのに、いらいだち、腹を立て、悲しむ「おれ」の姿を描いている。(二〇一字)

解答例 発展

・「SF」はサイエンス・フィクションの略。

科学的な空想に基づくフィクションのこと。

現実につながりながら、現実には起きないことが起きる。常識を覆す独自の発想を、読者は楽しむことになる。一般に、ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』やH・G・ウェルズの『タイム・マシン』などが初期作品として有名である。

・歴史小説が歴史上実在した人物を用いて、史実に忠実なのと異なり、吉川英治『宮本武蔵』などの時代小説では、その時代の設定の中で、架空の人物が登場したり、史実と異なる物語が展開したりする。

・フィクション以外の作品がノンフィクションなのだが、調査に基づいた報告・ルポルタージュなどを指すことが多い。

解説

「おれ」は、異次元の地球で、同じ境遇にある「地球から来た男」に出会い、彼と酒を飲み、地球の思い出話でようやく小さな安らぎを得る。かつてと全く変わらない待遇を得て、妻子と同じような生活を送っているのに、彼はいらいらして、幻聴を聞く毎日だった。人とのつながりが必要としていたのだ。故郷としての地球への郷愁は、地球という物理的な環境や生活レベルを求めているものではなかった。彼は、自分を追放された夫だと思い込んでいる妻に同情し、地球に残してきた妻子を思い出して涙を流す。

星新一著「地球から来た男」角川文庫刊『地球から来た男』所収。

押絵と旅する男

P 18 ～ P 19

解答 内容理解

- 1 大気 2 狂気 3 魔術師 4 遠近法
5 双眼鏡 6 幸福 7 苦悶 8 押絵
9 新婚 10 闇

解答例 語句

刹那 感動したその刹那の感覚が忘れられない。

遠近法 都会の風景を、遠近法を使って描く。

巧緻 職人技が、巧緻な細工の伝統を伝える。

挙動 不審な挙動の男が、尋問を受ける。

解答例 主題

押絵の中の老人は、悲劇の主人公お七に恋して吉三に取つて代わるのだが、その嬉しそうな顔は、三十年を経て、悲痛と恐怖の表情に変わる。筆者は、若く美しい娘の隣で自分だけ年をとるという悲劇となった、押絵にまつわる不思議な物語を描いている。(二二五字)

解答例 発展

・密度の異なる大気の中で光が屈折し、物が浮き上がったたり、逆さまに見えたりする現象。魚津は蜃気楼の名所で、大気的狀況で様々な像が、色々に変化して、時に数時間にわたって見ることができる。

・遠くから見えて方向感覚の目印となり、また

その地域のシンボルとなるような存在がランドマークである。ニューヨークの自由の女神、パリのエッフェル塔などの人工の建造物、また「富士見〇〇」の地名が多くあることから富士山が自然のランドマークとなっていることがわかる。

・一八四一年に発表の『モルグ街の殺人』は初の推理小説とされ、後の作家に大きな影響を与えた。ほかに『アッシャー家の崩壊』『黄金虫』『黒猫』など。

解説

魚津の蜃気楼を見て、「恐怖に近い驚き」に撃たれた「私」は、その帰りの列車の中で、それにも増して、別世界とも思えるものに出会う。のぞきからくりの押絵の八百屋お七に、洋服の白髪男がよりそって生きている。双眼鏡でその絵をのぞかせた男は、「私」に、兄だというその老人の不思議な恋物語を語って聞かせ、押絵の謎が解かれていく。「私」は、その押絵の前で、彼の話に引き込まれてしまう。ちよどののぞきからくり夢中になるお客のように。

マンガは哲学する

P 20 ～ P 21

解答 内容理解

- 1 通念 2 真実 3 発想 4 常識 5 狂気
6 整合性 7 固有 8 映像 9 拡大
10 哲学

解答例 語句

中途半端 中途半端な所でやめず、最後までやりぬく。

自明 その先は自明なことなので、説明を省く。

特有 その地方で特有の自然現象に驚く。
融合 東西文化が融合し、新たな伝統が生まれる。

解答例 要旨

常識にとらわれない問題提起が可能なマンガは、世の中の規範を無視しているのに、リアリティと整合性を保ちつつ、包み込むように現実を捉え直してしまう。マンガの問題提起によって、もつともつと哲学的な人が現れるはずである。(二〇六字)

解答例 発展

・主人公ちさとは夢の中で見知らぬ土地に迷い込み、赤い壁を越える。向こうからクラスメートの育代が現れ、翌朝、育代の体に入り、ちさとと一緒に登校しようとした育代が眠っているちさとを見たとき、同時にちさとの意識は自分の寝顔を見ていた。ただし、夢の世界で。育代が居眠りを始めたとき、ちさとは育代の現実と離れた本来の夢の世界に戻れる。ただし、他人の夢の世界に。夢の中で迷子になったちさとは自分の夢に、そして自分の現実に戻ろうとする。
・手塚治虫『ブラックジャック』では、「延命

させることで患者を幸福にできるのか」といった問題が問われる。

・唯一の真実はなく解釈こそ重要だとして、既存の概念を解釈し直し、独自の概念によって新たな思想を生み出した。

解説

「まじめな話が嫌い」、「ばかばかしさが込み上げてくる」、「ドストエフスキー、夏目漱石や森鷗外などよりはるかに深く」のような挑発的な表現は、世の中の規範や約束事、常識を超える哲学的考察を、マンガ特有の表現による問題提起から導こうとするからである。ただし、マンガの表現法を持たない筆者の、例えば「赤い壁」の粗筋の説明は、難解にならざるをえない。もつと哲学的な人が現れると同時に、もつともつとマンガ的な人が次々と現れると信じていいのだろうか。

こころ(前半部)

P 22 ～ P 23

解答 内容理解

- 1 勇気 2 公平 3 弱い 4 理想 5 犠牲
6 恋 7 正直 8 覚悟 9 過去 10 影法師

解答例 語句

所作 茶道の所作を師匠に習う。
相応 品物に相応な金額を支払う。
萎縮 強敵を前にして萎縮してしまう。

矛盾 相手の論理の矛盾をつく。

解答例 主題

お嬢さんへの恋を打ち明けられた「私」は、かつて「K」が自分をたしなめた言葉と口調を使い、自分がお嬢さんを得るために、Kをやり込めてしまう。作者は、友達思いの同情心に富む青年が、友人を裏切ってしまう物語を描いている。(二〇七字)

解答例 発展

・毎朝届く新聞に、話の一回分が掲載され続いている小説で、読者は、昨日の回の余韻を楽しみながらその日の回を読んで明日への予想や期待を抱き、話を読み進めていくことになる。欧米では、チャールズ・ディケンズやコナン・ドイルが執筆しているし、森鷗外の『渋江抽斎』は、大正五(一九一六)年一月から五月にわたり掲載された。

・こころの「上」と「中」では、学生である「私」がたまたま知り合った「先生」と親しくなるが、「先生」の謎めいた生き方を不思議に思い、さらに近づいていく。内容の深刻さと別に、探偵小説の謎解きのような形が出来上がっている。

・幼少期、漢文・文学を志したが、兄の反対もあり、帝国大学英文科に入学、後に英国留学も経験している。

解説

「私」は、学費を絶たれ窮する友を、自分の

し、友を裏切った、真面目な「私」は痛烈に責め苛まれる。

山東京伝

P 26 ～ P 27

解答 内容理解

- 1 不平 2 丸薬 3 尊敬 4 畏敬 5 遠慮
6 両手 7 玄関 8 鬼 9 人間 10 心外

解答例 語句

上座 床の間の前に上座を設ける。
無遠慮 式場での無遠慮な言動を注意される。
心外 受付での軽い扱いを心外に思う。
当惑 丁寧な挨拶に、かえって当惑する。

解答例 主題

山東京伝を慕い、敬う私の気持ちを描かれるが、山蟻を客として取り次ぐというあり得ない間違いをしでかして追い出されてしまう。わかつたようでわからないその理由に私は納得したのか、作者は、夢の中での納得感を読者に味わわせている。(二一〇字)

解答例 発展

・江戸時代後期の浮世絵師・戯作者で、寛政の改革では手鎖の刑に処される。吉原に遊び、花魁を身請けして正妻としている。また後に、喫煙用の小物販売店「京屋」を開き、自らデザインした紙製煙草入れをヒットさせてい

こころ(後半部)

P 24 ～ P 25

解答 内容理解

- 1 得意 2 解釈 3 覚悟 4 拘泥 5 明言
6 運命 7 良心 8 卑怯 9 真面目
10 敬服

解答例 語句

優柔 いつも優柔で決断ができない。
意向 実行前に、相手の意向を確かめる。
復活 敗者復活の戦いで勝ち上がる。
回避 危険を回避する運転を習得する。

解答例 主題

裏切った結果を友に告げねばならない「私」は、自分の信用を守るために、またそれが自尊心にとって苦痛であるためKに話せず、Kの自殺を止められなかった。筆者は、真つ先に遺書の内

容を確かめるような「私」の利己心を描こうとしている。(二二一字)

解答例 発展

・ラフカディオ・ハーンの後任となった、東京帝国大学での講義が不評だった漱石は神経衰弱を患い、その治療として高浜虚子に創作を勧められ執筆したのが、処女作『吾輩は猫である』と言われている。

・漱石の教え子でもあり、華嚴の滝に入水自殺した藤村操の「巖頭之感」が知られる。市ヶ谷の自衛隊東部方面総監室で総監を拘束、企図果たせず割腹自殺する三島由紀夫は、あらかじめ「益荒男がたばさむ太刀の鞘鳴りに幾とせ耐へて今日の初霜」「散るをいとふ世にも人にもさきがけて散るこそ花と吹く小夜嵐」の辞世を用意していた。

・明治天皇の大喪の礼の日、御真影の前で、割腹したまま妻の自害を見届けた乃木は、膝下に立てた軍刀で自らを貫き絶命した。

解説

現代人にとっては、「あの娘が好きなんだ」「いよね。僕も前から好きなんだ」で終わってしまいう話かもしれない。Kには、積み上げてきた精進の歴史と堅い信条があり、私には正直で信頼できる男という体面がある。自分の狡猾さ、卑劣さ、倫理的な弱点を抱えて、「私」は動けなくなる。Kの悲劇は、「私」の思いやり、正直さ、自尊心ゆえに起こったとも言える。「もつと早く……」というKの遺書の言葉に、友に復讐

る。読本創出者としても知られる。

- ・明治・大正期に、雑用をしながら他人の家に寄宿し、勉強する学生が書生と呼ばれた。京伝の時代であれば、内弟子として師匠の家に住み込み、その業を習うことがあったが、京伝は、後年、弟子を取らなくなっている。
- ・大学教授としてドイツ語を教え、卒業生との交流が、黒澤明監督の映画『まあだだよ』に描かれている。琴の宮城道雄に師事し、二人の交流を描いた随筆も多い。作品では、旧字旧仮名遣いを固守し続けたことでも知られる。

解説

漱石の『夢十夜』では、「こんな夢を見た。」で始まるものが多いのだが、この文章は、これが夢だという記述はなく、実は夢だったと夢オチになるものでもない。漠然と、なんだかこの話はおかしいと思わせながら、結びのおかしな論理に主人公が納得して、夢の中の論理、夢の中の納得に、読者は、なるほど夢ってこんなものだと思ってしまう。京伝のイメージが誇張されて描かれ、京伝に会いたかった百閒が、本当にこんな夢を見たのではと思わせる。

「東京語」の表象の成立 P 28 ～ P 29

解答 内容理解

- 1 東京 2 標準語 3 江戸 4 混合

- 5 読者 6 外国語 7 全国内 8 人工書き 10 近代

解答例 語句

雑然 汚れて雑然とした部屋を整頓する。
利点 鉄道の利点を自動車と比較する。
無難 新任の挨拶を無難にすませる。
論調 厳しい論調で問題を追及する。

解答例 要旨

明治期において、全国どこでも誰にでも通じる標準語が必要となり、近代日本が「国語」の理念を確立するために、実際には誰も話していない東京語を標準語として文法や辞書を整備し、全国の小学校で使用する標準語政策が進められた。(二〇七字)

解答例 発展

- ・山田美妙は、『金色夜叉』の著者尾崎紅葉らと硯友社を設立、「です・ます」調での作品を発表した。「言文一致」は、それまでの文語体でなく、話し言葉に近い口語体で文章を書くこうとするものである。三遊亭円朝の口述筆記を参考にしたという二葉亭四迷の『浮雲』に始まり、樋口一葉・森鷗外などが、様々な文体を試みている。
- ・上田万年はドイツ留学後、西洋の言語学を取り入れ、標準語や仮名遣いの統一に尽力した。円地文子の父。
- ・その国で公的に用いる規範となる言語が標準語であるが、具体的には、政治・文化の中心

地の言葉(例えば「江戸語」)を洗練させた理想上の言語ということになる。全国に普遍的な言葉という意味では、「共通語」が用いられる。

解説

地元のお年寄り同士が話す方言が、外国語のように聞こえて全く分らないことがある。近代化にあたって、標準語が必要とされたのも、想像にかたくなくない。「東京語」が「国語」の理念的な空間で象徴的に存在する言葉であることは指摘の通りで、それが規範として必要とされたのである。言語は、個人のレベル、公用のレベルで常に変わりつつある。法律分野では戦前まで文語体が生きていたことからしても、言文一致という運動は、どこまでも続く営みであるとも言える。

短歌の輪郭

P 30 ～ P 31

解答 内容理解

- 1 パロディ 2 アイロニー 3 呼吸 4 はじめて 5 偶然 6 比喩 7 三十一 8 地名 9 キーワード 10 歌枕

解答例 語句

流通 新しい硬貨が流通する。
想起 正直と聞いて誰もが彼を想起する。
隠れ蓑 犯罪の隠れ蓑だった会社を取り締ま

る。暗黙 暗黙の了解事項が明かされてしまう。

解答例 要旨

和歌の本歌取りという修辞法は今使われないが、例えば、石川啄木の短歌を受けて作られた短歌がいくつもある。歌枕も、同じ構造で短歌の表現力を広げている。筆者は、和歌の修辞法が現代の短歌の表現に受け継がれていることを指摘している。(一二二字)

解答例 発展

- ・三行の分から書きとする形式、日常の生活実感を歌う歌風で、今日でも愛唱される多くの短歌を残した。代用教員や新聞の友軍記者、校正係など勤めたが、生涯、経済的困窮に苦しみ、二十六歳、肺結核で逝去。
- ・青春のみずみずしさが刺激的な短歌でデビュー、平板な日常を歌う当時の歌壇の反発も受けるが、短歌という形式を超えて増幅する才能は、演劇や評論などジャンルを飛び越えて発揮された。カルメン・マキのヒット曲「時には母のない子のように」の作詞、アニメ「あしたのジョー」では、主題歌の作詞だけでなく、劇中のジョーのライバル、試合直後リングで息をひきとる力石徹の葬儀で、葬儀委員長を務めている。
- ・格調高い歌風で『万葉集』第一の歌人と評価され、後、「歌聖」として神格化、生涯は伝説化された。

解説

並記された啄木と修司、人麻呂と裕子の短歌を例として説かれた、「本歌取り」と「歌枕」の説明は、説得力があるだけでなく、古歌を受け取った短歌を、筆者がさらに受け取って、すぐれて深い鑑賞となっている。和歌の詩としての構造が受け継がれ、新鮮な感性が新しい表現をまもって生き続けていくことを、証明している。修司、裕子の短歌を受けて、また新しい詩が生まれる。文法学習を乗り越えてでも、古典文学を学ぶ意義もここに明らかであろう。

現場に来て初めてわかること P 32 ～ P 33

解答 内容理解

- 1 媒体 2 趣味 3 難民 4 笑顔 5 安全 6 リアリティ 7 プロパガンダ 8 不浄 9 虐待 10 軍服

解答例 語句

撤退 不景気で海外企業が撤退する。
疑念 丁寧な説明で相手の疑念をぬぐいさる。
純然 越権行為を純然たる事実として非難する。

力説 製品の長所を力説して販売数を増やす。

解答例 要旨

難民キャンプでは、笑顔の人が多い。「かわい

そうな難民」という報道は、同情を集めるためのプロパガンダとも考えられる。筆者は、ときにそれは希望に沿わないものだが、現場のリアリティはそこに来て初めてわかると述べている。(二〇六字)

解答例 発展

- ・戦場において取材し、戦闘や兵士、被害者などの映像を伝えるのが、戦場カメラマンである。従軍記者の一員として軍隊に同行、あるいは、フリーランスとして活動する写真家も多い。ベトナム戦争では、沢田教一をはじめ多くの日本人カメラマンが活躍し、社会的に影響を与えた。常に危険にさらされ、二十世紀を代表する戦場カメラマンのロバート・キャパは、第一次インドシナ戦争の取材中、地雷の爆発で命を落としている。
- ・戦争や災害で居住地を離れて国境を越えた人々が、集まって居住する場所が、難民キャンプと呼ばれる。
- ・猫は家庭で普通に飼われ、モスクにも出入り自由である一方、犬は忌み嫌われ、絶対数が少なく、散歩も見かけないという。

解説

写真発表の媒体を失い、趣味としてソマリアに来て写真を撮る瀧野さん。赤字でのソマリア取材を生きがいとしている筆者。兵士の死体を食べに集まる犬たち、そんな悲惨な状況に接する二人がともに明るい。難民キャンプは「別に悲惨ではない」、そして笑顔の人が多い、とい

う現場からの証言は貴重で、重症の我が子を抱いてほえむ母親の写真こそ、現地の困難さをリアルに伝えるという指摘は、映像を超えて、言葉がその力を発揮していると言えるのではないか。

空缶

P 34 ～ P 35

解答 内容理解

1 原爆 2 爆風 3 終戦 4 舞台 5 生徒
6 弁論 7 脳裏 8 命 9 出向 10 真珠

解答例 語句

矯正 矯正した視力を検眼で計る。
微妙 ニュアンスの微妙な違いを説明する。
懸案 長年の懸案事項が解決する。
異動 異例の人事異動に皆が驚く。

解答例 主題

被爆時に背中に食い込んだガラスは、切開すると、三十年の歳月で真珠のように脂肪で包み込まれていた。原爆症への恐れ、食い込んだガラス、そして心の傷を抱えながら、明日を生きたいこうとする、かつての女学生の姿を、筆者は描こうとしている。（二一四字）

解答例 発展

・旧制高等女学校は、女子に対する中等教育機関として、明治三十二（八九九）年、高等女学校

令が公布され、男子の旧制中学校以上にその数を増やしていく。男女別学で、「家庭婦人」としての技芸習得の場とされた。
・大正十四（一九二五）年、普通選挙が実現するが、男性のみの参政権しか認められなかった。以後、戦後の昭和二十二（一九四七）年、「法の下平等」で女性参政権を明確に保障する日本国憲法が施行されるまで、婦人参政権すなわち女性参政権を求める運動は続けられた。
・アジア太平洋戦争末期、労働不足を補うため、中等学校以上の学生が、軍需産業などでの労働を強いられた。

解説

旧校舍を訪れた五人は、それぞれの思いを語り合う。それは、女学生時代の思い出であり、今抱えている不安である。自らの半生への悔恨であり自負であり、青春時代をともにした者にしかわからない、互いの本音の述懐である。五人は、あの日、あのことがなければとは、決して口にしない。その出来事が、あまりに重く、運命的であつたからだろう。彼女たちが背負われたガラスの破片は、その出来事を乗り越えて生きてきた力、これから生き続けていく力に、輝いている。

野火

P 36 ～ P 37

解答 内容理解

1 敵中 2 直感 3 可能性 4 怒り
5 姿勢 6 動機 7 事故 8 国家 9 敵
10 後悔

解答例 語句

歯ざしり 完封負けが悔しくて歯ざしりをかむ。
余韻 名演奏の余韻にひたる。

日常茶飯事 戦場で危険は日常茶飯事だと覚悟する。
循環 部屋の中の循環を促す。

解答例 主題

怒りの衝動に任せて無辜（むこ）の人を殺し、塩を奪った「私」は、自分の行為が暴兵のそれと違わないとはつきり自覚する。生きている意味を失い、なお生き続けようとする「私」の絶望的な孤独感を、作者は描こうとしている。（二〇〇字）

解答例 発展

・スペインの統治以来、フィリピンでは多くの教会が建てられ、布教の中心となった。信者が集う場所であり、鐘楼があつて、その地域のランドマークとなつていいることもある。
・塩は、体内の水分量を調節し、細胞の浸透圧を保つのに不可欠である。塩が不足すると、血液低下や循環不全が起こり、死に至る危険がある。塩の流通のために、古来、塩の道として交易ルートが発達した。

・軍服と銃で兵士として敵に認識される。銃は殺すための道具であるとともに、殺される目

印であるとも言える。フィリピンのルパンダ島で終戦後も諜報活動が続けた小野田寛郎陸軍中尉は、九九式、三八式の二丁の小銃を所持していた。

解説

男の後ずさる姿勢に、『罪と罰』のリーザを連想して、その男を射ち、しかも装填を忘れて殺しそこなう「私」のような男を、どの国の軍隊も許容しないだろう。「私」はその考察癖ゆえに戦場に不適応で、孤独にならざるを得ない。敗兵として、教会という場所で殺人と窃盗を犯し、なおも山へと逃げ帰る私は、罪を、銃という殺戮の道具に着せて、これを放擲することとで前へ進もうとする。戦場において孤独な彼を、今度は、銃剣という武器が支配することになる。

転移する記憶

P 38 ～ P 39

解答 内容理解

1 体験 2 他者 3 余剰 4 暴力 5 分有
6 領有 7 突撃 8 英語 9 回帰 10 記憶

解答例 語句

忘却 戦争体験を忘却しないよう努める。
媒介 病気を媒介する昆虫を駆除する。
過剰 意識過剰で人前で話せなくなる。
拝聴 長老の御高説を拝聴する。

解答例 要旨

戦争という出来事の記憶は、当事者ではない他者に分有されなければならない。突撃の際に、日本兵の一人が意味不明の敵国語を発したという回想は、語り尽くせない、説明できない出来事の記憶として私たちに伝えられていく。（二〇三字）

解答例 発展

・日米野球は、明治四十一（一九〇八）年、米選抜チームの来日に始まる。昭和九（一九三四年）、ベーブ・ルースを中心選手とする米チームが来日、彼のホームラン、沢村栄治の好投に、日本人は歓声を送った。大戦が始まり、ベーブは憎しみの対象となり、沢村は、フィリピンに向かう輸送船が米潜水艦に撃沈され戦死している。兵士が「ベーブ・ルース」の名を叫んで突撃した話を含め、ロバート・K・フィッツ『大戦前夜のベーブ・ルース』に詳しい。
・被爆や空襲など、戦争体験を語り継ぐため、日本各地でさまざまな「語り部」グループが活動している。
・突撃と撤退を繰り返す、第一次大戦の塹壕戦を描いた映画に、『西武線戦異常なし』（一九三〇年）がある。

解説

リモン峠の戦いを語る米軍元大尉は、日本兵の死体を引きずってきて自分の壕に渡し……と回想する。その兵士は誰だったのだろう。彼の軍

本を読む

P 40 ～ P 41

解答 内容理解

1 主宰 2 戯曲 3 回想録 4 雑誌
5 江戸 6 小さな大人 7 秘蔵 8 枝
9 熱意 10 偷楽

解答例 語句

仕草 さりげない仕草に人柄が現れる。
行儀 行列に行儀よく並んで開店を待つ。
稽古 寒中の稽古で体を鍛える。
拍子 当てがはずれて拍子抜けする。

解答例 要旨

本を読むことが好きな人が、読むのが好きと書くことで、それが誰かに読まれる。楽しく書いているから楽しく読める本が生まれる。どの時代にも読書の愉楽は変わることなく、読み、書き、それがまた読まれるという営みはやむことなく続いていく。（二二三字）

解答例 発展

・「読売新聞」平成十二(二〇〇〇)年十一月二十九日掲載の二十一世紀に読み継ぐベスト10では、『日本書紀』、アンネ・フランク『アンネの日記』、『源氏物語』、ユーゴー『レ・ミゼラブル』、ドストエフスキー『罪と罰』がベスト5に選ばれている。

・『女人芸術』には、林芙美子『放浪記』が連載され、山川菊栄の評論「フェミニズムの検討」、八木さわ子訳のドーデ『アルルの女』などが掲載されている。

・『更級日記』は、菅原孝標女が四十年余の生涯を振り返る回想録で、書名は、少女時代の源氏体験をつづった作者が老いて、久しぶりに訪ねてくれた甥に、「月も出でで闇にくれたる娘捨になんとして今宵たづね来つらむ」(古今集「わが心慰めかねつ更級や娘捨山に照る月を見て」の本歌取り)と、老境を歌った和歌に由来すると言われている。

解説

口承で伝えられる文学は、それに聞き入り夢中になった者の中から、新たな語り手が生まれる。思いをたくした和歌が、相手の返歌を生み出すということがある。同じように、夢中で読書に耽った者が、その楽しみをつづつて新たな書き手となり、楽しめる本たちが生まれていく。言葉は、話し手と聞き手、書き手と読み手の間で成立する。江戸の文化を匂わせて、筆者が語る幼少時の読書体験は、言語文化の原点を、わ

かりやすく、楽しく、教えてくれている。

檸檬(前半部)

P 42 ~ P 43

解答 内容理解

- 1 借金 2 浮浪 3 植物 4 匂い 5 想像
6 現実 7 甘い 8 詩美 9 触角 10 書籍

解答例 語句

焦燥 締め切りが迫り、焦燥に駆られる。
安静 絶対安静の状態を乗り越える。
願わくは 願わくは幸多かれと祈る。
察し あらかじめ察しがついて難を避ける。

解答例 主題

病や神経衰弱や借金に苦しむ「私」は、「私」の好みである、みすばらしくて美しいものに慰めを求めるけれども、かつて好きだった場所である丸善は重苦しい場所となってしまう。筆者は、不吉な塊を抱えた「私」の苦しみを描こうとしている。

解答例 発展

・縦横の通りがほぼ直角に交差する京都の街は、例えば「三条通り麴屋町東入ル北側」で丸善の場所がわかる。通りの名前を覚える「まるたけえびすにおしおいけ」に始まる手毬唄があり、機械的な住居表示とは違うこ

解説

清少納言は、もう生きていけないという辛さも「よき筆、白き色紙、みちのくに紙」が手に入れば大丈夫、と言つてのける。花火やおはじきや切子細工への「私」の愛着、そのことへの読者の共感が読み進めるとともにいつのついでき、解決への期待が膨らんでいく。ささやかな心地よさが並べられ、傑作をページを繰るだけで見ることのできる楽園、丸善。やがて結びに至り、「私」の感性に引き込まれた読者は、この精緻に巧まれた文章に、完璧な結末に、大感激することになる。

檸檬(後半部)

P 44 ~ P 45

解答 内容理解

- 1 露骨 2 色彩 3 往来 4 単純 5 格好
6 塊 7 逆説的 8 嗅覚 9 善い 10 憂鬱

解答例 語句

空虚 空虚な空間が花一輪で明るくなる。
ほしいまま 展望台で絶景をほしいままにする。
いつになく 雷鳴が、愛犬をいつになく不安にさせる。
逆説 皮肉で逆説的な表現が彼の魅力となる。

解答例 主題

手のひらに冷たい檸檬は、「私」が抱える「不吉な塊」を和らげ、京都の街を歩く「私」のお守りであった。因縁の丸善という場所で、檸檬は全てをこっぴどみに吹き飛ばす爆弾と化する。筆者は、自ら体験した感覚世界の不可思議を描こうとしている。

解答例 発展

・高村光太郎『レモン哀歌』、サトウハチロー『リンゴの唄』、山村暮鳥『りんご』など。また梶井は、短編『檸檬』の発想と同じ内容の詩「秘やかな楽しみ」を残している。
・フィンセント・ファン・ゴッホの「夜のカフェテラス」が有名。アルルのフォリュム広場にあるカフェを中心とする夜景で、青と黄を使つて描かれた、店からこぼれ出る光が印象的である。
・『闇の絵巻』では、闇に広い展望を、『蒼穹』では青空の雲の生成を見るうちに、そこに虚

無の闇を見出している。

解説

さりげなく語られた、手の熱さ比べ、しかも借金に追われる「私」は、自分の錯覚の中でしたか、清浄な布団の上での安静を得られない。この痛ましさを、「私」は、「私」の大発見で慰める。確かに、一顆の檸檬は、冷覚、嗅覚、触覚、視覚にしつくりとした創造物であり、その重さには、全ての善いもの、全ての美しいものが、重量として換算されている。丸善での大胆すぎる企て。私たちは、この大発明、そして、この残忍で繊細すぎるテロリストに、手放しで拍手喝采せざるを得ない。

下町

P 46 ~ P 47

解答 内容理解

- 1 職人 2 行商 3 戦争 4 幽霊
5 居心地 6 気心 7 妙 8 背広姿
9 シベリア 10 東京

解答例 語句

人柄 温厚な人柄でみんなに慕われる。
恐縮 丁寧なものでなしに恐縮する。
音信 旅行先で音信不通となってしまう。
始末 後の一切を引き受け始末をつける。

解答例 主題

りよは、平凡に見えて、そばにいて居心地のよい鶴石にひかれる。夫の復員を待つりよは、鶴石が兵隊から戻ったら妻は他の男と暮らしていたと聞かされ、夫を思い、彼を受け入れることができない。作者は、そんな二人の切ない逢瀬を描いている。

解答例 発展

・注文を受けて各戸に配達するのではなく、商品を担いで、家々を訪ね売り歩くのが行商であり、特に敗戦後、夫が戦死して、生計のため大きな荷物を抱えて売り歩く女性の姿が、全国各地で見られた。

・第二次大戦の終戦後、武装解除した日本軍捕虜や民間人が、シベリアなどに連行され、過酷な労働を強いられて、多くの人が異国の地で命を落とした。画家の香月泰男は、これを原体験として作品を残している。

・焦土と化した東京で配給制度は機能不全で、ヤミ市が立ち、やがて商店街、繁華街へと変わっていった。

解説

粗筋を読むだけでなく、古びた恋愛ものの三文小説と思われるかもしれない。主人公のりよが開いた弁当には、まっくらい麦飯に、頬差しの焼いたのが二尾と味噌漬けが入っている。男のアルマイトの弁当箱には、薯飯がぎしつと押し潰れる程詰め込んである。二人は、七輪で焼いた鮭を分け合う。こうした一つ一つの細かい描写が、その時代の空気、匂いを感じさせるので

ある。結びの文の光る針の描写に、逆境にあって黙々と仕事に励む女たちの生きる輝きが象徴されている。

歩道橋の魔術師

P 48 ～ P 49

解答 内容理解

1 武器 2 商売 3 本当 4 嘘 5 見物人
6 心 7 目 8 大人 9 秘密 10 マジック

解答例 語句

そもそも 作戦よりもそもそも力不足で敗れる。

外見 人を外見で判断しないよう論される。

披露 練習した得意技を披露する。
朝飯前 完走など朝飯前と宣言して走り出す。

解答例 主題

歩道橋で靴ひもと中敷きを売る少年は、目の前で演じられるマジックに魅せられ、その道具を買い尽くす。やがてマジックの嘘を知り、本当のマジックの秘密に迫る。筆者は、少年の成長とそれを促した魔術師との不思議な交流を描いている。

(二〇九字)

解答例 発展

・一九六一年に完成した、台北市の北門から約

二キロに及ぶ、歩道橋が架けられた三階建て八棟のビルである。かつて、台北市民の生活の中心地だった。二〇二二年二月に放送開始された台湾テレビドラマ『天橋上の魔術師(歩道橋の魔術師)』では、最大級のロケセットが作られ、店舗や看板を含め、当時の雰囲気さながらに再現された。

・移動しながら販売する行商と違って、道路使用許可が必要となり、イベントでのフリーマーケットやお祭りでの屋台などに限られている。

・「脱出王」と呼ばれたハリー・フリーデーニは、超能力・心霊術を見破るサイキックハンターとしても知られた。

解説

小人に夢中の「ぼく」は、自分の商売のことを忘れる。そのとき、忘れられた風に揺れる靴ひもは、今思い出しても、美しい光景だった。「ぼく」は、マジックの道具に散財し、小人の死に涙し、秘密を明かしてと魔術師に懇願、拒絶されることで、成長し、大人になったのである。「ぼく」は、二つ、いや三つの目で世界を見る。本当のことは見えないかもしれないこと、本当のことは言えないこと、想像したものを見せるのがマジックであること、「ぼく」は、もうそんなことは知っている。

都市は／を語る

P 50 ～ P 51

解答 内容理解

1 記号 2 読者 3 前衛 4 要素
5 集合 6 意味 7 イメージ
8 パブリック 9 相互 10 構造

解答例 語句

手がかり 遺留品を手がかりに犯人を捜索する。
移行 新制度への移行を進める。
刻々 刻々と変化する状況を実況する。
個人差 体力の個人差を調査する。

解答例 要旨

私たちは、都市を歩き回ったり眺めたりしているとき、無数の読み方のできる巨大な書物を拾い読みするように、それぞれのイメージを膨らませながら、知らないうちに、都市の意味空間を読み解く読者となっている。

(九八字)

解答例 発展

・その著作『物語の構造分析』や『読書の快楽』で、作者の意図の理解が鑑賞であるという発想を捨て、創造的に読み解く読者の行為を強調した。また、『表徴の帝国』では独自の日本文化論を展開し、聖堂や広場を中心とするヨーロッパと比べ、中心に皇居の森を持つ東京の、意味から解放された自由さを肯定的に説いている。

・南米の風景、詩作や死についてのソネットを、コンビナトリーアで、読者が作って読めるのだが、ネットの日本版(自分で鉄を入れる)のレビューでは、もつたいなくて切れないという人もいて、新しい詩作例も見当たらない。

・パリのノートルダム大聖堂を舞台に、大聖堂の前に捨てられていたところを助祭長に拾われ、育てられた鐘つき男カジモドをめぐる物語。

解説

都市が注目されるのは、一つには、そこに人々が集まり、政治・経済・情報・文化などの中心として、そこからさまざまな発信がなされるからである。逆にその都市自体が、一つの巨大な書物として、我々読者に読み解かれようとしている。巨大で複雑なこの書物の読み解きの入り口は、イメージ。都市計画が想定するイメージとは別に、その都市のイメージは自ずと形成されていく。バルト『表徴の帝国』では、東京は中心を欠いているのが面白いという。京都は、大阪は……。

舞姫(前半部)

P 52 ～ P 53

解答 内容理解

1 恨み 2 覚え 3 美観 4 政治家
5 自由 6 所動 7 精神 8 豪傑 9 弱く
10 暫時

解答例 語句

功名 合戦で功名を立て、出世する。
破竹 新チームが破竹の勢いで連勝する。
有為 若く有為な人材を集め留学させる。
恍惚 名画に恍惚となつて見入る。

解答例 主題

学業に励んだ豊太郎は、出世の道を歩み、留学を勝ち取る。ドイツの大学の自由の風に当たったせいなのか、二十五歳にして、自分は政治家や法律家には向いていない、母との別れに涙する弱さこそ自分の本性だと悟る。作者は、こうした豊太郎の半生を描いている。

解答例 発展

・幕末期に既に諸藩がひそかに留学させることがあったが、維新後その数が増え、文部省が官選と私費に分け規定を定める。官選留学生は試験で選拔され、一定額が往復旅費とともに支給される。帰国後は官に奉職、あるいは返還の必要があった。官より命ぜられた学科を習得、公使はこれを監督し、毎年、状況を本省へ報告した。

・一八七一年、プロイセン国王ウイルヘルム一世が皇帝となつてドイツ帝国が成立、ベルリンは首都となり、その人口を増やしていく。市街地を取り囲むように税関壁が設けられ、ブランドンブルグ門も関税門の一つとして作られた。岩倉使節団や伊藤博文、森鷗外などの日本人が訪れている。

・六十三歳にしてプロイセン王となり、ビスマルクを首相に任命して軍政改革に取り組む。普墺戦争、普仏戦争を戦い、ドイツ統一を成し遂げ、ウイルヘルム一世としてドイツ皇帝に即位。崩御後、各地に騎馬像が建てられた。

解説

先進の知識や技術を身につけたり、語学に長じたりして、帰国後にそれを生かす留学生が多いのだろう。豊太郎は違った。語学はすでに習得済み、むしろこれまで秘められていた自身自身を見つけたのである。家名を背負い、母の期待、官長の励ましに縛られていた彼は、異国の地でそれらのくびきから解かれ、大学の自由な風に吹かれ、自分の進むべき道を探し始める。少なくとも、それは政治家・法律家ではない。そんな豊太郎は、同郷の留学生たちに疎まれ、嘲りを受ける。

舞姫(後半部)

P 54 ～ P 55

解答 内容理解

1 猶予 2 大事 3 数奇 4 別離
5 見識 6 名誉 7 信用 8 大都 9 良友
10 一点

解答例 語句

汚名 手柄を立て汚名を返上する。
思案 思案中の計画を実行に移す。

境地 座禪で悟りの境地をひらく。
円滑 道路整備を円滑に進める。

解答例 主題

涙する少女に声をかける大胆さ、外人ならかえって力を貸しやすいと機転を効かせる。そんな豊太郎が、信ずる友に、エリスとの関係を断つと軽率にも約し、頼む天方伯に帰国を問われ、はいと即答する。見識を得ても変わらない、人の弱さを作者は描いている。(一一八字)

解答例 発展

・ベルリンの冬は、日照時間が短く、暗い。長く外にはいられないほど寒い。平均気温が氷点下になる日が多く、積雪することは少ないが、降雪することは稀ではない。家庭にソリが常備されていたりする。

・明治十五(一八八三年、東京陸軍病院に勤務する鷗外は、ドイツ帝国陸軍の衛生制度を調べるため、ドイツ留学を命じられる。ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘンそしてベルリンに滞在し、カールスルーエ、ウイーンで開かれた会議に参加。医学先進国ドイツで四年間学び、ロンドン、パリを経由して帰国。帰国後、鷗外の後を追って、エリスのモデルとも言われるドイツ人女性が来日、一月の滞在で離日している。

・津和野藩の典医の家に生まれ、陸軍軍医となり、ドイツ留学を経て、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長に上り詰める。同時に、旺盛な文筆活動に励んだ。日露戦争時、軍医部長で

従軍し、多くの犠牲者を出した脚気問題に関わっている。

解説

天方伯に帰国を促されて、その瞬間に、豊太郎は、この機会を逃せば、「身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんか」と思う。その人の海の中に、我が子を孕む最愛のエリスがいるというのに。帰国を願うのが正直な気持ちなら、そしてエリスへの愛もまた真実なら、両方を生かす努力、工夫が必要になる。良友相沢はこれにも手を貸してくれたかもしれない。あそこでこうすれば……と思わせて、なんともやりきれない物語は、悲劇の幕を閉じている。

みづの上日記

P 56 ～ P 57

解答 内容理解

- 1 広告 2 露伴 3 文壇 4 崇拜 5 詩人
6 上達 7 栄え 8 清少 9 上手 10 赤飯

解答例 語句

崇拜 デザイン界のカリスマとして崇拜される。

取り沙汰 新製品の発表が世間で取り沙汰される。

不徳 会見を自らの不徳のせいだと締め括る。

反故 反故になった紙を再利用する。

解答例 主題

鷗外や露伴の好評を、平田・戸川の両氏は、我がことのように喜ぶが、妹の国子が案じたように、この人氣も一時のこと、妬みや憎しみからか悪評も立つ。作者は、女子であることを喜び、上手と褒めるばかりで、真の批評の少ないことを嘆いている。(一二三字)

解答例 発展

・明治二十九(一八九六年四月、『たけくらべ』が雑誌『文芸倶楽部』に一括掲載され、鷗外主宰の『めざまし草』掲載の座談会形式の文芸時評「三人冗語」がこれを取り上げた。匿名とはなっていたが、「頭取(鷗外)」が粗筋を述べ、「ひいき(露伴)」が「僅々の文字をもつて、実は当人すら至極に明らかに自覚せりとはいふにあらざるべき有耶無耶の感情を写したるは最も好し」「このあたりの文字五。六字づつ……」と褒め、「第二のひいき(鷗外)」は「一葉崇拜……」と褒めそやすのに、「むだ口(緑雨)」が相槌をうつ。該博、皮肉屋の三人が揃って褒めるのは異例。

・幼少より向学心旺盛で読書好き、歌塾「萩の舎」に入門するも、兄、父を失い困窮、小説家を志す。二十四歳病没。

・仮名垣魯文に師事、小説家・批評家として立つ。一葉宅を訪ねて語り合うなど、一葉没まで交流は続いた。

解説

一葉は、困窮生活の中でも来客を喜び、馳走したという。「取り分け此作は、筆も美しく趣も深く」で始まる露伴の評は、まさに「ひいき」のそれである。鷗外は一葉の夭折を悼み、軍の正装騎馬での弔問を打診して断られたとか。緑雨は、来訪して一葉との会話を楽しんだだけでなく、彼女の死後、全集の校訂を引き受け、遺族への援助を惜しまなかった。俗物、無教養を容赦なく批判する三人が、一葉に格別の誠意を見せるのは、彼女の才の非凡によるのだろう。

入れ札

P 58 ～ P 59

解答 内容理解

- 1 難関 2 区別 3 賛意 4 遠慮 5 方法
6 不愉快 7 栄辱 8 失望 9 嘘
10 卑しい

解答例 語句

手頃 中古品を手頃な値段で購入する。
既定 時間が経過し既定の事実となる。
勘弁 謝ったので勘弁してあげる。
心根 やさしい心根の人に憧れる。

解答例 主題

連れて行く子分を選ぶための入れ札は、九郎助には都合が悪かった。兄分である対面を保つため、九郎助は自分の名前を札に書く。作者は、自分の信望のなさ、浅ましき、卑しさを、面前

ではつきりと突きつけられたときの人間の弱さを描こうとしている。(一一八字)

解答例 発展

・京都大学時代、教授の上田敏に師事、『新思潮』同人となり戯曲や小説を発表。上京して時事新報社会部記者となり、『中央公論』に『恩讐の彼方に』などを発表。新聞小説『真珠夫人』が大人気となり、読者層を変え、文壇や作家に影響を与えた。雑誌『文藝春秋』を創刊、次々と売り上げを伸ばし、自身も大衆作家として、婦人雑誌や新聞に多くの小説を発表した。新人作家を顕彰する「芥川賞」「直木賞」を設立している。

・江戸時代後期の俠客、本名長岡忠次郎。上州・信州で縄張りをめぐり抗争。大戸関所を破った罪で磔となる。

・忠次の物語は大衆演劇の定番となり、「赤城の山も……」が決め台詞となる。多くの映画で阪東妻三郎などのスターたちが忠次を演じた。『名月赤城山』は、浪曲師広沢虎造の得意演目であり、東海林太郎が歌って大ヒット曲となった。

解説

投票する上院議員候補が、取材のカメラに向かって、「この一票で当選が決まることもあるからね」とスマイル、米テレビドラマの一シーンである。もちろん、常識として、自分の氏名を用紙に記入してあるのだ。自分こそ選ばれるに相応しいと信じるなら、自分に投票してなん

物語と歴史のあいだ

P 60 ～ P 61

解答 内容理解

- 1 無関係 2 資料 3 物語 4 記憶
5 再現 6 選別 7 間主観的 8 成立
9 関心 10 行爲

解答例 語句

擁護 人権を擁護する法律を定める。
面妖 面妖な事が続き、気分を入れ替える。
温顔 彼の温顔に出会い、心が休まる。
喝破 本質を喝破した言葉に感嘆する。

解答例 要旨

歴史と物語とは対立するものでなく、表裏一体のものである。物語る行為によって、断片的で間欠的な思い出は構造化、共同化され、間主観的な歴史的事実となる。我々は、物語りえないものについては、沈黙せねばならない。

解答例 発展

・『論理哲学論考』において、言語と世界とを

(一〇二字)

平行関係を考えつつ、その構造を説明することを試みた。この書に哲学の完成を見た彼の、論を締め括る言葉が「物語りえないものについて、沈黙せねばならない」である。『哲学探究』は、言語は日常的なコンテクストにおいてのみ機能するとし、これまでの哲学が言語と現実の関係を見誤った観点に立ち論じていることを示そうと試みた。彼は、これを実践して、小学校教師を勤めている。

・『様々なる意匠』『ドストエフスキーの生活』『私小説論』『モオツアルト』『ゴッホの手紙』『近代絵画』考へるヒント『本居宣長』など多数の論考で、近代日本の文芸評論を確立した。

・日本の民俗学的研究から出発し、フランスで人類学とアフリカ研究を学び、長年現地研究を行った。対比的な二文化の比較に、異なる第三の文化を加えて研究者の視点を是正する、文化の三角測量を提唱した。

解説

筆者は、「記憶」を、あらゆる歴史的出来事が貯蔵された水甕に喩え、「思い出」を、そのわずかな割れ目からにじみ出した一滴の水滴になぞらえて、小林の想いを汲んだ。そして、思い出が、物語行為を媒介とし問主観的な歴史となることを、因果の糸を張り巡らし、起承転結の結構をしつらえて一枚の布にあえかな文様を浮かび上がらせることに喩えている。一種の動物であることから救われ、人として物語ること、歴史を共有する道が示されている。

巨人の接待

P 62～P 63

解答 内容理解

1 地域話 2 表情 3 禁 4 公 5 天使
6 宝物 7 辞書 8 移動 9 パン 10 絶滅

解答例 語句

大仰 悪役の大仰な物言いを演出する。
内輪 内輪でもめて騒動が起きる。
異議 議事進行に異議を唱える。
目障り 相手の目障りな駒を封じる。

解答例 主題

大歓迎でもてなされるようになって、巨人は食事の最後にパンの欠片をズボンのポケットに忍ばせる。収容所での体験から、安心が必要なのだ。筆者は、ポケットのそのパンを森の鳥たちに与える彼の人柄とともに、彼の厳し過ぎた体験を描いている。

解答例 発展

・世界に六千から七千あるとされる言語のほとんどが、二十一世紀中に失われるとも言われる。例えば、タイ北部に住む狩猟採集民ムラブリの「ムラブリ語」は、話者五百人程度であるという。

・例えば、かつて北海道・東北・北陸・中国地方に分布していたトキは、急速にその数を減らし、平成十五(二〇〇三)年に最後の日本産トキ

の「キン」が死亡し、以降、中国産の子孫が人工繁殖され放鳥されている。

・異なる音声言語を話す人たちの間に入り、一方の言語を他方に変換して伝える仕事である。手話の話者と音声言語の話者との間に入ることもある。ノートをとる逐次通訳、ブリスからイヤホンに伝える同時通訳、傍らにいてさやくウイスパリング通訳といったやり方があるが、翻訳と違って、状況により専門の技術が求められる。

解説

強制収容所の悲惨は、犯罪としての追及を初め、さまざまな手段で告発されてきた。移動を拒否すること、食事でパンを残しポケットに入れること、絶滅した鳥たちへの愛惜。巨人の習慣は、その苦難の経験によっている。そして、生まれた地方の地域語を頑なに守り、その言葉で作品を作り続ける人生が、この犯罪への抵抗であり告発である。トキの絶滅は、人間による乱獲、農薬の使用、森林の伐採と湿地の農地化などがその理由とされる。巨人の仕事は受け継がれねばならない。

はじめての沖縄

P 64～P 65

解答 内容理解

1 移住 2 病 3 自説 4 生きる
5 原初的 6 多様化 7 素朴 8 風土

9 フイクション 10 内地

解答例 語句

若干 募集若干名の広告を出す。
開陳 最後に開陳される謎解きに期待する。
変貌 新駅の誕生で街が変貌する。
世俗 世俗に染まらぬ生き方を選ぶ。

解答例 要旨

沖縄の街も人も、言葉も文化も変わっていく。社会学者の言う風土に還元されるような無内容なものではなく、「沖縄的なもの」は、誰もが知っているけど気づかないもの、当たり前すぎて注意しないかわからない、沖縄の空気のようにそこにある。(一一二字)

解答例 発展

・岡本太郎『沖縄文化論 忘れられた日本』の中で、太郎が歓迎の宴で泡盛を注文したら怪訝な顔をされ、なるほど、沖縄の人たちは、ビールやウイスキーを飲んでいたというエピソードが語られる。前書きには、「……島の本質は少しも変わらない。この世界の自然の波動と、生活の中に流れている、分厚く、優しい魂。そのきよらかさ。」とある。
・高温多湿の亜熱帯気候であるが、海風が吹き込み、日差しは強くても猛暑日は少ない。台風が接近上陸すること多い。
・沖縄学の父と言われる伊波普猷や外間守善など。沖縄に美術教師として赴任した鎌倉芳太郎は、沖縄の文化・芸術の研究を始め、紅型

の技術を習得、文化財を調査して多くの写真を残した。これらの写真は防空壕で守られ、戦後、沖縄を知る極めて貴重な資料となった。

解説

「俺の方がデイーブな沖縄を知ってるんだ」と言い争う「沖縄病のナイチャー」には笑える。大正十三(一九二三)年、鎌倉芳太郎が、神社建築の第一人者伊藤忠太に急報したことで、沖縄神社を作るため取り壊されようとした首里城正殿が守られたという。彼の写真がなければ首里城復元はできなかったろうとも言われる。岡本太郎が撮った写真は、『沖縄文化論』を飾り、強烈な印象を与えて、人々に沖縄をアピールした。ともに、沖縄とともに生きたナイチャーである。

アイデンティティ

P 66～P 67

解答 内容理解

1 工場 2 自覚 3 獲得 4 思索 5 不死
6 恐怖 7 記憶 8 ゴミ 9 名乗り
10 自分

解答例 語句

神妙 神妙な顔をしてお説教を聞く。
駄目押し 勝利のため駄目押しの一点を取る。
丁重 申し出を丁重にお断りする。
維持 健康の維持のため早起きする。

解答例 主題

自分の望まない自分の像を押し付けられたとき、「猿です」「蛙です」と自分を主張できるだろうか、それとも「人魚です」と押し付けられたものを受け入れるだろうか。作者は、アイデンティティの危機をはらむ寓話を描こうとしている。(九八字)

解答例 発展

・ヨーロッパの人魚伝説では、上半身ヒト下半身魚類のマーメイドだが、日本書紀に既にその記述がある日本の人魚は、時代により姿は異なるが、多くは怪物ととらえられている。山東京伝作「箱入娘(せういろう)屋人魚」では、浦島太郎が浮気した鯉の遊女との間に人魚が産まれ、捨てられた人魚は漁師平次に拾われ、平次を口説いて妻となる。やがて遊女となり……という破天荒なストーリーが現代人にもウケて、漫画化・映画化もされている。小川未明に童話『赤い蠟燭と人魚』がある。
・江戸時代の見せ物の代表的作り物で、日本各地に残るが、輸出されたものも多く、大英博物館等が所蔵している。
・江戸時代には、金銀銅・茶・陶器・漆器・醤油など、明治となって、茶・陶器・工芸品の他に、生糸や綿糸、マッチや樟脳などの軽工業製品が輸出を伸ばしていく。

解説

お話の中で不老不死となった「それ」は、お

前は何かと問われ、「猿です」「蛙です」「人魚です」と、その答えに苦しめられる。アイデンティティの危機に怯える不老不死の人生なんて、生きているとは言えない。博物館の展示物として「それ」が語りかける話に、人々は納得するのだろうか。一方、古く、山東京伝の描く人魚は、色々な騒動があった後、殻が抜けて人間となり、しかもその殻を売って大儲け、漁師平次と二人で幸せに暮らしましたとき、というのが結末である。

愛について

P 68 ～ P 69

解答 内容理解

- 1 解放 2 普遍性 3 排除 4 プロセス
5 倫理 6 自己 7 政治 8 次元 9 未来
10 間主體

解答例 語句

多彩 チームに多彩な顔ぶれが集まる。
亀裂 人間関係に亀裂が生じる。
賛同 設立の趣意に賛同して協力する。
持続 持続可能な社会を目指す。

解答例 要旨

語り手と聞き手は、語る・聞くという行為によって自分の位置をずらし、自己の中に差異を生ずる。語るという間主體的な政治行為は、自己への応答という倫理行為として体験され、自己の

内部で生じた差異は再び、新たな語りへとつながっていく。
(二一二字)

解答例 発展

・ハノイ生まれ、サイゴンで育ち、ベトナム戦争中アメリカへ移住。比較文学を学び、詩作・作曲・映画など多分野で活動。ポスト・コロニアリズムの思想家として支持を得ている。
・数学の微分概念を転用して、差異の哲学を構築、ポスト構造主義を代表する哲学者と言われる。ヒューム、スピノザ、ベルクソンらの著作を、独自の視点で読み直し、ブルースト、カフカなどの文学作品を読解してみた。また、監視カメラやデータベースなど、個人管理のためのテクノロジーの発展による、今日の管理社会を予測している。
・名著『ジェンダー・トラブル』において、幅広い領域で、ジェンダーとセクシュアリティ研究を推し進めた。

解説

「アイデンティティ政治」は、特定のマイノリティの利益を代弁して拡大させようとするが、例えば、アフアーマティブ・アクションは、逆差別との批判を生むことになる。「賛同と批判の両面で議論の俎上が上がってきた」のように、ここでの具体的な議論は避けられ、歯切れのいい結論を出すわけにはいかない。「名づけるは一回性のものでなく、生成のプロセス」とあるように、「自己の内部で生じた差異」が、「間主體的な係争」へと連鎖していくというのが現

俳句の力学

P 70 ～ P 71

解答 内容理解

- 1 思想 2 季題 3 形式 4 五音 5 生活
6 器 7 言葉 8 単純 9 対照 10 自由

解答例 語句

由来 地名の由来を古文書から調べる。
大概 大概の人が賛成できる案を作る。
中立 論争で中立の立場を守る。
帰着 無難な結論に帰着する。

解答例 要旨

俳句は十七音の定型と、日本人の生活感覚に即した季題によって、堅牢な形式として受け継がれている。時代の風雪に耐えた俳句という器に自由な発想で複数の言葉が投じられたとき、言葉と言葉の関係がクローズアップされ、複雑な効果が生まれる。
(二一二字)

解答例 発展

・二十歳にして江戸へ出て漢学を学ぶ。京都で、歌道・茶道・書道を学んだという。芭蕉庵の近くに隠居、芭蕉と親交を深めた。『続虚栗』序文で、芭蕉の「不易流行」に通ずる、花に、「時の花」「終の花」のあることを論じている。
・現代にも通じる名句を数多く残し、後世、「俳

状である。

聖」と仰がれる俳諧師。「桃青」やがて「芭蕉」と号するが、『芭蕉を移す詞』に、「たまたま花咲けども、はなやかならず。茎太けれども、斧にあたらず。かの山中不材の類木にたぐへて、その性たふとし。」と、庭の芭蕉を「莊子」の「山中不材木」にたとえて、芭蕉への思いを述べている。
・浅草生まれ、浅草育ち。劇作家・演出家・作家として、多方面で活躍。芥川龍之介と親交を結び、龍之介は万太郎の句を「東京の生んだ『嘆かひ』の句」と評している。水原秋桜子の「いとう句会」では宗匠として招かれている。

解説

虚子の言うように、「単純に叙して複雑な効果をもたらす」のが俳句だという割り切り方、試験管に言葉を放り込んだら何とかなる、という喻えには、異論があるかもしれない。芭蕉はまずは連句の宗匠であり、蕉風の「軽み」は、『虚栗』の漢詩調を経てのものだからである。筆者は、「割り切つて物を見、風景を単純化」した作例に、短歌を並べてみせてくれる。この対照的な二つの短詩の形式が、長く受け継がれ、これからも生き続けていくだろうことに感謝すべきなのだろう。

一瞬の共同性を生きる

P 72 ～ P 73

解答 内容理解

- 1 解釈 2 物語 3 社会 4 フィクション
5 共同性 6 公 7 一瞬 8 スタート
9 相互 10 意識

解答例 語句

依存 石油依存のエネルギー事情を改善する。
形式化 形式化した古い制度を改革する。

強要

寄付を強要されて拒絶する。

独善

我を張つて独善に陥らないようにする。

解答例 要旨

自分と他人の、言語化できない記憶や感情を言葉で物語化し、その物語が共有されたときに共同性が生まれる。物語が固定化しようとしたとき、それを壊すのが文学であり、文学は物語に共同性を与える力であり、それを批判する存在でもある。
(二二〇字)

解答例 発展

・欧米の小説では、理想や夢を抱き、その実現を目指す人物が多く登場するのに対し、日本では「私小説」というジャンルがあるように、社会化されていない個の内面が描かれるだけという指摘がある。

解説

理想の社会実現の物語は、排他主義や独裁、監視社会を産んできた。文学、広く芸術はそれに抵抗し、また貢献してきてもいる。「アツツ島玉碎」を描いた画家、藤田嗣治は、戦後、戦争協力画家として追及され日本を去るのだが、最後に描いた戦争画「サイパン島同胞臣節を全うす」は、戦意昂揚を目的とするはずが、死と向き合う人の厳粛さを漂わせ、反戦画との二面性を持つとの評もある。「文学とは」「一瞬の共同性だけを生きる言語なのだ。」は、筆者の信条として理解される。

苦海浄土

P 74 ∼ P 75

解答 内容理解

1 目 2 湾 3 集落 4 不安 5 魚 6 猫
7 生活 8 解剖 9 有機 10 漁師

解答例 語句

律儀 律儀で几帳面な性格が好感を持たれる。
素性 素性のわからない野良猫が増える。

手応え 自分の解答に手応えを感じる。
一部始終 話の一部始終をレコーダーに記録する。

解答例 主題

夫婦の二丁櫓で目の前の湾に舟を出し、魚を獲るといつつましく平和な生活は、海の汚染により壊された。発病した妻のために、とれたての魚で夫が作る新鮮なはずの刺身が、病の原因になっているという悲劇を作者は描いている。
(二〇五字)

解答例 発展

・新日本窒素肥料(後のチッソ)水俣工場附属病院長 細川一は、猫に水俣工場廃液を与える実験で、運動失調の症状を示すことを確認し、工場責任者に報告した。これは公表されなかったが、後に臨床尋問で、この「猫四〇〇号実験」を会社側も知っていたことを証言、

チッソの過失責任を認めた判決が出る。
・昭和四十三(一九六八)年、チッソ水俣工場は、メチル水銀を発生させるアセトアルデヒドの製造を停止。ヘドロを回収し埋め立てる工事が行われ、平成九(一九九七)年、熊本県が水俣湾の安全宣言を行った。
・煩惱は心身を悩ます心の動きで、釈迦は智慧によりこれを断つことを説く。患者救済に尽くす作者は、「もうひとつのこの世」を希求していて、成仏より、もう一度人間に生まれたいという本心の願いを言ったことになる。

解説

本文の要約、空欄などは、内容理解の便法であり、作品本文を読み直し、作者のこの土地、そこに生きる人々に寄り添う心を感じ取るべきである。この著作により、水俣病が一般に認知された。高度成長する日本が直面した水俣病という大事件では、これに立ち向かう人々の、生きることへの根源的な姿勢が試された。原因究明する科学者、責任を追及する弁護士、患者の支援活動、そして、苦しむ人々とともに、魂の救済を目指した筆者の活動は、苦海における光明となる。

日本文化私観

P 76 ∼ P 77

解答 内容理解

1 装飾 2 必要 3 美しさ 4 郷愁

5 謙虚 6 観念 7 芸術 8 不要 9 健康
10 真実

解答例 語句

威圧 威圧的な態度に臆せず対応する。
変哲 何の変哲もないデザインがヒットする。

終始一貫 終始一貫して初心を忘れない。
代物 安売りで大変な代物を買ってしまった。

解答例 要旨

自分の心に直接突き当たってきて、郷愁のようなものを感じさせる美しさがある。それらは無駄な装飾を排し、必要から生まれた物たちである。必要から生まれた美を重んじ、真実の生活を送る限り、文学も文化も健康であり続けるはずだ。
(二〇八字)

解答例 発展

・工場めぐりのバスツアーが企画されていて、臨海地域の石油コンビナートなどの夜景は、ライトアップされた複雑なパイプなどが、重厚でミステリアスな景観を呈し、注目スポットとなっている。
・日露戦争までに、小型高速で魚雷装備し、主力艦攻撃、水雷艇撃退、哨戒などが任務の駆逐艦が多数作られた。ワシントン条約での主力艦の劣勢を補うため、日本海軍は航海性に優れ、雷撃・砲撃力を強化した、他国の駆逐艦を凌駕する艦艇を設計、建造する。第二次

大戦では、船団護衛、対潜、輸送、防空などの任務も担った。終戦まで沈没を免れた幸運艦「雪風」は、戦後復員輸送船となり、最後に賠償艦艇として中華民国に引き渡された。

・オーエンスがヒーローとなるベルリンオリンピックでは、ナチ協力のもと、レニ・リーフェンシュタール監督が、スポーツの普遍的身体美をモチーフに、映画『オリンピア』を制作、戦後、プロバガンダだという批判を受けた。

解説

法隆寺や平等院が焼けてしまつていいと本当に思う者は、どれほどいるのだろう。和辻哲郎『古寺巡礼』や亀井勝一郎『大和古寺風物誌』を読み、著者と同じように、仏像を含めた大和の風物に心よせる人は多い。筆者の「必要」「実質」を強調し、装飾、見かけを嫌う姿勢はエネルギッシュであり、「猿まね日本」「エコノミックアニメル」と揶揄されて悔しい日本人への励ましとなるかもしれない。筆者の言う通り、今も、「われわれの文化は健康」で「われわれの伝統も健康」である。

現代日本の開化

P 78 ∼ P 79

解答 内容理解

1 自然 2 節約 3 娯楽 4 集合 5 開化
6 内発 7 西洋 8 不満 9 活力 10 幸福

解答例 語句

曲折 幾多の曲折を経て事件が解決する。
地道 地道な努力が実り正選手になる。
旺盛 珍現象が旺盛な好奇心を刺激する。
語弊 語弊を恐れて言い方を改める。

解答例 要旨

開化は内発的でなければならないのに、日本の開化は西洋からの圧力を受け、外発的なものにならざるをえなかった。西洋が百年かかって発展した開化を短期間に達成しようとすれば、大変な労力を要し、人は神経衰弱に陥ってしまう。
(二〇六字)

解答例 発展

・イギリスで起こった産業革命は、技術革新、エネルギー革命、交通革命などを伴い、社会構造を変えていく。社会面はもちろん、技術面だけに限っても、長期にかけ漸進的に進化した。市民革命とともに、近代とそれ以前を分かつ出来事であり、ベルギー、フランス、アメリカ、ドイツ、そして日本と、各国に波及していくことになる。

・英国留学時、神経衰弱となって帰国を命じられている。胃潰瘍で体内出血を起こし亡くなるが、それまでに「修善寺の大患」を含め、五度あまり胃疾患で倒れている。神経過敏でストレスに弱く、そのため、過食や糖分依存に陥り、胃腸に負担をかけ過ぎたとも言われている。晩年は、痔を患い、糖尿病を併発し

て闘病に苦しんだ。

・インド、ビルマ、マレーはイギリスに、インドシナはフランスに、シベリア、中央アジアはロシアに、フィリピンはアメリカに、インドネシアはオランダに植民地化され、独立までに多大な時間と犠牲を払うことになる。

解説

威臨丸で米国に渡った福沢諭吉は、諸方の製作所に案内され説明を受けるが、既に知っていることが多かったという。驚いたのは、「社会上政治上経済上の事」であり、後に「一身独立」を説くことになる。英文学研究に違和感を覚え、英語教師、留学生となって、神経衰弱に陥る漱石とは対照的である。漱石は、他国の植民地になった日本を想像することもあったのだろうか。日本人は「言語道断の窮状」にあるとの嘆きは、今日においても、なるほどもつともな指摘である。

精選 文学国語 構成・読解ノート (小説・評論) 解答・解説編

令和 5 年 2 月 10 日 初 版 発 行
令和 6 年 3 月 10 日 初版 2 刷発行

発 行 所 株式会社 明 治 書 院

〒 169-0072
東京都新宿区大久保 1-1-7
電話 03(5292)0117 (代)